

クラシクス

聴き比べの楽しみ——芸術のクオリティ

クラシック音楽鑑賞の醍醐味の一つとして、全く同一の曲を異なった演奏で聴き比べることができる点があります。ベートーヴェンのピアノソナタや交響曲など、いったいどれだけの録音が残されているのか、今となってはその数を数えるだけでも大仕事となってしまいます。



あれこれと悩むのも聴き比べの楽しみ

クラシックは多くの場合基となる楽譜があり、その楽譜から外れて演奏するという事はほとんどありません(もちろん例外的に演奏家による編曲、楽譜が原典版であるか否か、など細かい相違はあるのですが)。ところがクラシック以外の音楽となると、楽譜そのものが無かったり、たとえ楽譜があったとしても全く同じように演奏するという事は稀なことであり、クラシックの聴き比べのようなことはほとんど考えられないのではないのでしょうか。

敢えて他の芸術に似たような例を探すと、能や歌舞伎、あるいは正教のイコン画のように一定の型が決まっているようなものが考えられるでしょうか。これらはいずれも「古典」と呼ばれるようなものである点でも不思議な一致がみられます。

同じ楽譜でありながら、テンポの違い、音の強弱、ペダルの踏み方、ポルタメント、スラーの解釈など、演奏家によってさまざまな違いがあり、それらの細かな違いから「この演奏はロマン的な解釈である」「この演奏こそが正統な解釈である」などと侃々諤々できるのは、クラシック愛好家の一つの特権であるのかもしれませんが。しかもさまざまな演奏解釈が正統を競った挙句に、(昔の作曲家であれば)誰も聴いたことのない作曲家自身による最も正統的な演奏、というもので仮想的には存在するのですから、議論はいきおい紛糾することにもなるでしょう。

ところで、聴き比べの話聞いていていつも気にかかるのが演奏に上下を付けたがることです。以前にも書いたように、演奏すること、その演奏を聴くということは、ほぼ完全に主観的な行為ですから、これに順位を付け、さらにはその順位を他人と共有しようという企ては非常に危険かつ報われないことであるように思われます。音を間違えたとか、録音が良くないとか、およそ芸術とは関係ない部分にわずかな客観性が残されているだけです。

同じように、演奏の好き嫌い、その演奏のクオリティそのものの混同も少なからず見受けることがあります。「この演奏のこの部分が嫌いであるから、この演奏は良くない演奏である」という評は、音楽の重要な部分を見落としています。嫌いな演奏であってもクオリティ——この場合私が考えているのは芸術的な面でのクオリティ——の高いものは存在するでしょう。また、およそ芸術的にはまだ未成熟である近所の子供の演奏が好き、ということも当然に起こりえることでしょう。

演奏を聴く上で好き嫌いをはっきりとすること——主観的になること——は重要なことですが、同時に芸術的なクオリティ——これ自体も主観的であるが故に問題はより一層困難になるのですが——という別の尺度も考慮されなければならないと思うのです。

しかし、繰り返しになりますが、このような聴き比べができるのはクラシック愛好家ならではの特権であることは動かしようがありません。せっかくの権利なので大いに楽しみ、謳歌し、時には難しい議論などを戦わせてみたいものです。

神田神保町 クラシクス 店主 木下 慎